

たより

『美紗の会』

ニュース

第四号

平成五年二月三日

発行者
「美紗の会」事務局
☎ 03-3441-2726

綱大計画活動五年平成

—会主を中心に—

盛んになる公演

望まれる会員の理解

年の前半を中心に、会主の活動が決まりつつある。昨年引き続き舞台公演、後援会での演奏に加え、海外からの要望も増える。飛躍の四年になるか、新しい行き方の成否を占う大切な年になるだろう。

既に出演、参加が決っている主なものは次の通り。
二月七日・『美紗の会 おひきぞめ』（国学院大学・院友会館）
三月七日・『邦楽と会席の夕べ・上方舞と唄』『舞・山科千代恵、唄と三弦・会主』（伊香保さつき亭）
四月一日・『地唄舞の夕べ』『舞・閑崎ひで女、清女、尺八・宮崎青歌、胡弓・小原清歌、唄と三弦・会主』（ニューヨーク・ジャパンソサエティ）
四月十四日・『第三回花の季』（日立市シビック

センター）
五月十八日・『朝日アリート』レクチャー コンサート『講演・大岡信、舞・閑崎ひで女』
六月六日・『邦楽と会席の夕べ・尺八と三味線のひととき』（伊香保さつき亭）
六月二十三日・『第三回清麗会 閑崎清女リサイタル』（国立小劇場）
七月十一日・『第十一回美紗の会 ゆかたざらい』（白金福祉会館Ⅱ予定）
九月二十四日・『華の会 閑崎ひで女一門の会』（国立小劇場）

第十四回 おひきぞめ

「おひきぞめ」も今年で十回を数え、二月七日御馴染みになった国学院大学・院友会館で催される。

昔からの兄弟姉妹、新しい仲間、各地から駆け付けられる友もあり賑やかになるだろう。

十一月九日・『閑崎ひで女りさいたる』（赤羽北とびあ）
十一月十一日・『第三回松風会』『特別出演、神崎秀珠』（渋谷 東邦生命ホール）
閑崎一門の地唄舞への出演が定例化する一方、伊香保・日立への招待公演も回を重ねる。

一方、昨春秋成功をおさめた海外は、既に決まっているニューヨーク公演に加え、日程が合えば、再びアマースト大学を訪れる話がソルト教授から出ており、秋にはドイツでの演奏のお誘いも来ている。

また十一月には、西松流の祖・文一師の遺志を継ぐ三回目的松風会が渋谷東邦生命ホールで催される。ここでは、邦楽の新しい生き方を模索し、アマーストで新、旧時代の芸術の見事な調和と橋渡しを演じ、西欧の邦楽研究者に大きな感動を呼び起こした会主の生き方の原点を見、聞く絶好の機会になる。

「会員消息」

* 田島綾子
十一月二十日・長男 真生（まなぶ）誕生。三〇六〇グラムの元気な子。母子共に幸せな毎日。二月からのお稽古復帰を楽しみにしています。
* 中西けい子
昨年七月から一年の予定で豪州ゴールドコーストに滞在。週五日の学校と週三日のアルバイトと充実した毎日。ゴールドコーストにお出での節は声をお掛け下さい。

* 高橋 剛
一月末から二十日の予定で糖尿病教育入院のため帰国。四月のニューヨーク公演に備え、体調万全にしておきます。
* 増田真知子
当会ベテラン増田徳子さん宅のお嫁さんがお稽古開始。母娘揃っての活躍を期待。
* 三階久夫
横浜『読売カルチャーセンター』で師匠の端唄教室に通っていましたが、師匠に是非直接習いたく、仲間に入れて頂くことになりました。

【随筆】

佐久間 俊治

随筆 佐久間 俊治

二十年程前に、リオデジャネイロに駐在した時の話であるが、まだ小学生だった娘達の日本語教育の副読本として、落語全集を文庫版で揃えて持って行った。

帰国した時レベルが落ちない様にとの配慮から、日本の教科書類はすべて持参し、家で家内が教えていたが、娘達にとっては通っているアメリカンスクールでは英語、街ではポルトガル語、家では日本語を喋る上に、日本の教科書を勉強させられるのは相当苦痛だったらしくよく家で泣いていた。

副読本に落語を使ったのは私のアイデアであるが、結果的にはそれなりに成功だったと思う。教科書よりははずっと

面白いからよく読むし、私が音読してやると喜んで聞いている。時々娘達の喋り方が落語調になって、「するってえとなにかい」などと云い出したが放っておいた。

英語の副読本にはスヌーピーの漫画を使った。これも可愛らしく面白いので単行本を次々と買って親子で取り合う様にして読んで笑った。

要は勉強も興味を持って楽しくやれば身につくということだろう。

一方親父の方はポルトガル語が分らないと生活出来ないの、興味からではなく、必要に迫られて個人教授の特訓を受けた。若い美人の先生におだてられながら、四ヶ月位殆んど毎日さぼらずに教わったので、一年後には日常生活には困らないレベルになったが、その後は使う機会もない

ので、今ではせいぜいサッカーチームの「読売ワルディ」というのは「緑色」という意味だよと知ったかぶりをする程度にしか残っていない。

それでもあの時特訓が成果を上げたのは、美人の先生への興味から、さぼらず勉強を続けたからだと信じている。

興味がある上、素晴らしい先生に恵まれているのに、何年経っても駄目なのが小唄である。

おさらい会の前の特訓して、完全に覚えたと思っても、しばらくすると忘れ小唄で、全く思い出せなかつたり、音程が狂うのは不思議な位である。私の音に対する自信は小唄を習うことにより喪失してしまつた。

どうも西洋音楽や演歌や民謡とは異質の音楽の様である。
(二面へ続く)

日本の芸術家・アメリカで成功のデビュー

アンドリュー ダーバン

『前近代から将来へ：日本の音楽、舞踊、詩の夕べ』(From Pre to Post-modern: An Evening of Japanese Music, Dance and Poetry)と名付けられた催しは、本学の者が滅多に経験できないやり方で、日本の芸術家が、芸術様式の包括的な見方を示した貴重な贈物になった。公演では四人の芸術家が同じ舞台上立ったが、これはアメリカのみならず日本でもなかったことである。

演目は十だったが、殆どの演技で二人以上が共演した。各演者についてはアジア言語文化学のジョン・ソルト助教授が紹介した。ソルト助教授は四人をアムハーストに招いた責任者で、公演の通訳を務めた。

主演者西松布咏は有名な三味線奏者で、文楽や歌舞伎で唄われる浄瑠璃の唄い手でもある。藤富保男の詩は二、三十年に亘って広く出版されており、詩に合わせて描く彼の漫画的な絵も評価を得つつある。西川雅恵は日本舞踊の有名な踊り手、関崎純女は日本の歌舞伎、地唄舞に育てられた名だたる舞い手である。これらの芸術家は日本では広く活躍しているが、今回の公演は布咏と雅恵にとってはアメリカでの初舞台になった。

演奏は各演者、演目を通じてスムーズに流れた。古典舞踊と現代詩、時にはそれが同時に演じられる、といった異質の表現法に満ちた夕べだったが、

それらがぶつかり合ったり、不協和音を出したりするものではなかった。

時代を異にする日本の芸術が影響し合い共存するという大きさが、聴衆にある種の驚きを与えたが、この並置こそが公演の意図するところだった。そういった意味で『前近代から将来へ』という主題は、古典から現代への展開といった、単に直線的な進化以上のことを包含していた。そして事実この公演は過去と現在の芸術の本質的な結び付けを確かめるものになった。

この様に芸術家達は公演の成功をおさめた。布咏は、非常に印象的だった最初の『夕暮』、技術的に難しいとされる歌舞伎の『きりぎりす』でいずれも一人で三味線と唄を演奏し(通常三味線と唄は別人が演じる)独演者として素晴らしい演奏を披露した。彼女はまた、従来三味線に与えられていた役割を越え、自分自身と三味線の幅広さを証明する如く、保男のユーモラスな現代詩に伴奏を付け、古典と同じように素晴らしい芸術を披露した。

雅恵は第二の演目、歌舞伎の『娘道成寺』で伝統舞踊の踊り手として練達の域にあることを示した。芸者の卵である舞妓の役で、雅恵は考え抜かれた優雅さを表わしていたし、彼女の一步一步は物語に流れる情緒を伝えるように、注意深く計算されていた。その雅恵が着物を着たまま、保男の詩『椅子と酒』を踊ったのと同じ人物だとは信

じられなかった。そこでは彼女はウイスキー瓶を手に酔い潰れ、男に恋を告白する女の大胆さを演じ上げた。ここでも又、古典と現代の二つの表現方法が同時に示され、両者の間に壁がないことをはっきり示すことになった。

もう一人の舞い手、純女は雅恵の様な存在感こそめさなかったが、それでも二つの演目で、他の出演者と同じような意図は表現した。

保男は、音楽、踊りに合わせ一連の詩を発表したが、多くは多数の観客に笑いを誘った奇妙な詩『椅子と酒』の様に滑稽なものだった。また、幾つかの詩と共に、彼の描いた絵のスライドも映写された。

保男の最後の詩『月』は当夜の集いの総てを集約した。日本の伝統的芸術作品のモチーフとなってきた月を取り上げたこの詩は、布咏が三味線を弾きながら保男の詩を詠い、雅恵が踊るといった形で発表された。

三人は夫々日本の古典と現代の芸術を維持するのに大変な努力をしている。藤富は現代詩に古典的テーマを採り入れた。西松は新しい曲を伝統的な楽器で演奏し、現代詩を古典的手法で唄った。西川は古典的衣装で現代のオリジナル曲を踊った。

催しのタイトルが示す様に、芸術家達がそれぞれの方法で、過去と将来の芸術の底にある本質を引き出したやり方は、それぞれの演奏者と芸術の資質を現すのに役立った。『月』は多くの目の高い観衆を引き付けた夕べの最後を飾るのに最も相応しいものだった。

(by Andrew Durbin "The Amherst Student" Dec. 2, 1992 齋藤訳)

(一面随筆「習いごとと興味」続き)

洋楽の場合和音のルールがあつて、次に来る音が或る程度予測出来るのに対し、邦楽の場合その予測とかけ離れた奇想天外の音につながるものがある。せつなく苦勞して覚えるも、しばらくするとときれいさっぱり忘れてしまうのだろうか。

従つて十数年習つていても、完全にマスターして、すぐに唄えるのは幾つもないというのには情ない話である。

若しかするとこれは、簡単に覚えられるとすぐに弟子達に獨立して師匠になり、家元が困るのでわざと難かしく、いやらしく作曲して弟子に覚えにくくしておき、お家の安泰を図るという陰謀ではないかと思う。

『編集雑記』

* 師匠の予定表に大岡信・関崎ひで女との舞台がある。(五月十八日)

* 『折々のうた』の著者として多くの読者に感銘を与えてきた詩人大岡氏は地唄舞の理解者としても知られる。

* 著書『忙中閑を生きる』には地唄舞と関崎ひで女について鋭い見方が記されている。

* 氏によればヨーロッパ語のダンスは日本では「舞」と「踊り」に分けられる。

* 「踊り」が跳ね上がり飛び上がるのに対して「舞」は平面上の巡回運動である。

* 地唄舞は専ら平面上を旋

回運動し、跳躍を極度に抑さえていく点で舞の原義に近い。

* 地唄舞に用いられた詞章は封建時代の抑圧された女性の悲しみを歌ったものが多い。

* しかし舞では感情の奔流を直接的に表現せず、切り詰めた動作の中に静かに舞う。

* ひで女は、能面の静かさを保ちながら感情の動きを表わすのは目だと言っている。

* 西松文一師は生前布咏師に、地唄について技巧以上に感情表現の難しさを説いている。

* 静かさの中に秘められた心の動き、日本人の大切にしたいものである。(た)

『邦楽一口メモ』

有吉佐和子『地唄』に暫く触れなかった三味線の皮が裂ける描写がある。猫の皮は非常に繊細で不断の手入れが必要。稽古用三味線には犬皮、最近では人工皮革などが使われるようになったが、音は猫が最高(師匠の話)。

ねこは常に構われない。

『邦楽一口メモ』

有吉佐和子『地唄』に暫く触れなかった三味線の皮が裂ける描写がある。猫の皮は非常に繊細で不断の手入れが必要。稽古用三味線には犬皮、最近では人工皮革などが使われるようになったが、音は猫が最高(師匠の話)。

ねこは常に構われない。